

## 庄内地域と公益に関するメモ

— 三原容子さんの批判にこたえる —

小松 隆二

### 序 論争の高揚への期待

学問は、創造・発見を本質の一つとするが、それに挑戦する大切な糧を論議・論争は提供してくれる。とりわけ新しい学問や研究領域では、研究の進展のためには、多くの研究業績があいついで世に送りだされ、成果として蓄積されること、それと共に先行した研究や成果をめぐる批判・反批判が繰り返され、論議・論争が盛り上がる必要がある。それによって、その学問は、初めて学として確立する方向に道筋が用意されることになるであろう。公益論・公益学もその例外ではない。

公益の領域では、公益の文字を標題に含む著作や論文も随分増えた。しかし先行成果に対する批判やそれを超える新しい視点・理論の提示、あるいは新しい資料、方法、理論に基づく既存の成果を超えるより高いレベルの研究の成果と蓄積が決して十分ではなかった。百家争鳴とはいかなくても、もう少し批判・反批判の試行錯誤、とりわけたんなる批判を超える新しい資料、方法、理論の提示をとまなう挑戦があつてよい。

そんな思いのときに、同僚の三原容子さんが、すでに発表した私の公益に関する著作にみられる視点や方法に対して本誌第12号に批判を寄せられた。「研究論文」と銘うたれた「公益考(二) 庄内地域史の取扱いについて」がそれである。自ら発掘した新しい資料や新しい定義、あるいは体系性を示す方法論や理論を掲げての批判ではないが、私としてはどのような形の批判であれ、私個人の研究のためにも、また学界のためにも大いに感謝・歓迎すべきことと考えている。これを機に、私にも、また三原さんにも、批判、あるいは新しい理論や資料に基づく問題提起がどんどんなされることを期待している。

今回の拙稿はエッセー風のものであるが、三原さんの批判に対する私の回

答である。ただし、三原さんの論稿全体に対してではなく、私に対する批判の部分に限定して回答するにとどめることにする。

## 1 社会運動家は公益の視点からは評価できないか

三原さんは、最新の拙著『公益の種を蒔いた人びと』（東北出版企画、2007年）において私が取り上げた人物を念頭において、公益の範疇に入る人物の広がりをお問うている。その拙著に対しては「ワッパ騒動の森藤右衛門ら、支配者に対抗した運動関係者を全く入れていない」（103頁）と一面的に批判され、また「反体制的活動によって投獄された者も、自己を顧みずに世のため人のために尽くした人物と評価できるが、彼らも数えるのかどうか」（87、88頁）という疑問を提起されている。正直のところ、どうしてこういう批判がでるのか、すぐには理解できなかった。

私は、拙著において公益的な人物の第一弾としてⅠ部において11名、あわせてⅡ部において「海岸クロマツ林」をはじめ5つの領域に関わる多くの人物をとりあげている。Ⅰ部の人物を11名に絞る際にも、入れるべきかどうか迷った人物が何人もいた。同書では、11名だけでも約束の原稿枚数を超えるほどであったが、既存の研究を超えて、新しい発見や評価を付加するには資料不足、時間不足、時代の不適合などから取りあげることができなかった領域や人たちもいた。

そのことを、私は「まえがき」で明快に断っている。「紙面の都合などで十分に採り上げるのでできなかった領域の人たちもいる。例えば医療サービス、社会運動・労働運動・協同組合運動、文化・芸術活動などの関係者がその例である」（前掲拙著、8頁）の下りである。そこでは、三原さんの指摘する「社会運動・労働運動」関係者のことにも言及している。それに続けて、「そんな領域の人たちを、次にチャレンジする若い人たちは是非採り上げてほしい」。そして「これらの課題を果たすためにも、本書の続編や改訂版が若い人の手で遠からず編まれることを期待している」とも記している。

また『公益の種を蒔いた人びと』と一連をなす他の著作（私の市民講座の講義録をもとに編集された『公益の源流、酒田を歩く』28頁、東北公益文科大学・

「公益の源流、酒田を歩く」編集委員会、2006年）では、三原さんがこだわる森藤右衛門を、私は公益の先駆者としてとりあげて説明もしている（もっとも彼は無告の民ではなく、地域リーダーではある）。藤右衛門については、心の中で思っているだけではなく、明確に活字でも公益の先駆者として位置づけているのである。

以上の2点、つまり「支配者に対抗した運動関係者」（三原前掲稿、103頁）でもある社会運動や労働運動関係者については今回は触れられなかったことを同書の中でわざわざ断っている点、および他で藤右衛門を取り上げている点を、三原さんは何故か全く無視されている。

公益あるいは公益活動を「つながり」「思いやり」のように科学性などに関係なく広く理解する人にとってはもちろん、三原さんのように公益を「世のため人のため」と同義に解釈する人にも、三原さんの配慮する社会思想家や社会運動家は、公益研究の対象や視野に入りうるし、評価対象にもなりうる（三原さんは、今回取り上げた「公益考（二）」において、「『公益』や同義語として用いられる『世のため人のため』（三原稿、87頁）」という説明をされるが、「世のため人のため」については、私は公益と同義語ではなく、公益の一要件に過ぎないと理解している）。さらに、たんなる「思いやり」ではなく、自分や自分の集団を超える思いやりを公益の原点に、「不特定多数に対する非営利の活動」が公益活動として展開されるというふうに、科学性を考慮して狭義の規定を基本にすえて第一段階では比較的限定してとらえる私のような見方・理解でも、同様に社会思想家や社会運動家は公益の範疇から排除する理由はない。

他で小さな原稿を書いたこともある斎藤秀一のような社会運動家や思想家で、いずれ公益の視点から書きたいと思っている人物は何人かいる。斎藤といえば、上記の三原さんの「反体制的活動によって投獄された者も、自己を顧みず世のため人のために尽くした人物」という規定と、ほぼ重なる人物である。もっとも、「自己を顧みず」という部分は必ずしも適切とは思っていない。私は、公益の実践家や貢献者、あるいは社会運動家が必ずしも「自己を顧みない人」とは考えていないからである。

斎藤秀一は、佐藤国蔵ら11人とは活動した時代が異なるので、今回は対象外であったが、私が公益の先駆者・貢献者を考えるとき、彼をはじめ、社会運動

家を相応しくないと考えたことはなかった。だからこそ、小冊子では森藤右衛門を取り上げることもしたのである。

私は、方々で公益の定義を示しているが、そこではイデオロギー的なこと、例えば体制派か反体制派か、右か左か、あるいは上層か下層か、などということは、定義の中には要件や尺度として特に関わらせていない。そういった単純な二分論的な理解は、現代では必ずしも適切ではないとも考えている。

また社会変革をめざす運動の場合、最終目的のみ重視され、プロセスが軽視されるといった、目的と手段、目的とプロセスの一貫性を無視した、かつての観念的社会変革論、つまり変革達成までのプロセスでは階級意識・革命意識を失わないためにも、労働者・農民はむしろ低劣な生活・労働条件のままの方がよいと言わんばかりに、改良的施策・政策を否認した観念的運動論はとらない。資本主義初期や社会運動の黎明期のように、民衆が運動の主役になりきれない段階では、経営者、地主、政治家、研究者・教育者など地域リーダーの役割も一定限度評価する。だから、佐藤国蔵以下の人たちも相応に評価する。同時に、藤右衛門や斎藤秀一のような立場の人であれ、公益に貢献した人として排除する理由は、私にはない。もし排除するのであれば、藤右衛門のみか、民衆レベルにまで掘り下げた研究に先駆的に取り組んでいる「ワッパ騒動義民顕彰会を呼びかける会」(現・ワッパ騒動義民顕彰会)の発起人に、応援するという程度の関わりであれ、名を連ねることなどはありえないはずである。

むしろ、私はそういった人物には大いに興味がある。小野武夫らの民衆重視の農民・農村研究にも大いに感銘も受けている。ただ、鉄人ならいざしらず、年齢的・体力的に限界があり、「まえがき」にも書いたように極端に短い期間で稿をまとめなくてはならないという時間的制約のあるとき、あるいは他の研究者・専門家による著作などが出版されて間もなく、それに新しい資料や評価などで付加すべきものがほとんどない人物の場合は(佐藤治助氏の『自由民権の先駆者 森藤右衛門』〔鶴岡書店、2002年〕はまさにそれにあたる)次の機会にゆずらざるをえない。

研究者としては、専門の論著はもちろん、紹介や啓蒙的論著でも、研究者として発表する場合には、資料、視点、方法など何であれ、新しいものを付加する必要があると、私は考えている。すると、あれもこれもではなく、文献・資

料的に、あるいは方法的に取り組みやすい人物、すでにある程度知識・資料をもって、自分なりの評価や位置づけのできている人物からまとめざるをえない。それが、現在の力量を考えた私の正直な事情・状況である。

また立場上、戦略的にも、公益に関しては成果としてまとめたものから発信する必要を考えてきたので、その点からも、まとめやすい人を優先するというのが、これまでの私のやり方であり、限界であった。今回とりあげた人物以上に、もっと興味をもっている人物でも、既存の研究を超える新しい見方・成果を付加できないので、本格的取り組みや発表を先延ばしにしている例を、私もいくつも抱えている。それが実情である。

三原さんには、他を批判すると同時に、ご自身が重視すべきと考える人物については自らどんどん取り組まれ、紹介を超える研究成果を発表されることをお勧めしたい。他人は、自分がよしとする人物などそうそう取り上げてくれるものではない。他人に無いものねだりをするのは、結局自分にも類似の批判が返ってくるだけに終わりがねない。三原さんが、よしとする人物については自ら本格的に取りまとめ、発表されることが、御自身の主張を強化することになり、かつ学界に対する大きな貢献にもなるはずである。

ついでながら、学生や市民から、有名人を取り上げるのは分かるが、無告の民・無名の人はどうなのかと言う質問を受ける。大変意味のある質問で、当然のことながら公益の歴史研究にとっても、無告の民・無名の人たちの発掘、説明は欠かせない。ところが、民衆なり無告の民を掘り起こして、伝記にまとめたり、運動史に明快に位置づけたりすることは、それほど簡単にできることではない。もしそれができたら、夢のような話で、誰しも感激することである。

無告の民が一般的にモノを言い、さらにその中のあるものたちが社会運動陣営に本格的に参加するのは、日本ではあらゆる社会運動が昂揚する第一次世界大戦後のことである。私が拙著で主に対象とした明治・大正初期の時代に関しては、無告の民を掘り起こし、伝記にまとめるのは至難の業である。社会運動領域にあっても同様で、リーダークラスならある程度説明できるが、無名の活動家・運動家を短期間で説明するのは、極めて困難な作業である。それでも、文献・資料・記録、それを探索し深めるだけの体力の維持や時間の確保等ができれば別である。それを考えると、無告の民の解明のように長い年月をかけ、

根気のいる調査・研究は、現在の私などには到底無理であり、若手や中堅の研究者にこそ期待せざるをえない。

私は、公益や公益活動が実践（性）と極めて緊密な関係にある領域やテーマと考えている。実践には戦略的なこと、もっと正直に言えば政治的判断を全く回避することはできない。それに対応して、私は純粋に科学性や客観性の視点のみで、公益を研究・追究する姿勢はとってこなかった。公益大学のため、地域のためを私なりに考えて、学問的な重要度や優先度とともに、取り上げやすい人物や成果をあげやすい人物などを優先して取り組むことも、あえてせざるを得ないと考えてきた。「公益の故郷」の提唱もそういった視点と無縁ではない。

蛇足ながら、私が取りあげた地主、経営者、教育者、政治家など当時（主に明治から大正期にかけて）は比較的有名であった人でさえ、現在は地元でも忘れられ、無名の存在になっている例が多いことも付け加えておきたい。

## 2 庄内地域は「公益の故郷」に相応しくないか

反体制的活動家が公益の範疇に入るのかどうかという三原さんの問いかけ・疑問は、もともと庄内地域を「公益の故郷」と位置づける見方に対する批判との関連で出されている。

この「公益の故郷」の批判でも、三原さんは「公益の故郷」について自らの定義を示した上で、庄内地域が自らの認識や定義とは異なっていると主張されているわけではない。私は「故郷」「里」「郷」あるいは「源流」などは一つである必要はない、いくつもあってよい、と考えてきたし、そう説明もしてきた。

三原さんは、私などと違って、故郷に「過去を振り返るような」（103頁）認識・イメージをもたれているように、故郷にしても人によって多様にイメージ・解釈できる用語である。方々で「孟宗の里」「たけのこの郷」を名のりあってよいし、方々に「童謡の故郷」「童謡の里」があってよいと思っている。木下順二の名作『夕鶴』で知られる「鶴の恩返し」の話は、形を変えて全国各地に残っているので、方々でそれに関わる「里」「ゆかりの地」が名のられている。山形県でも、南陽市の宮内地区が「夕鶴の里」を名のり、施設をつくっている。各々の間に優位度の比較などは不要で、むしろ多様性こそ尊重したいと考えて



いる。

また源流にしる、斎藤茂吉が最上川やドナウ川の源流が複数あることを確認したように、転じて三原さんがこだわる社会運動の中から、一例として日本の「戦後あるいは今日の労働組合（運動）の源流」はどこに求められるか、といった課題を考えてみても、その答えは必ずしも唯一絶対的なものではない。いくつも考えられ、それぞれに論理的にも説明・理屈は成り立ちうる。あとは各人が自らの視点や論理からどの説を採るかである。

例えば、その源流を1912年の友愛会の成立に求めるもの、日清戦争直後の労働組合期成会とそれに続く3労働組合の成立に求めるもの、1890年代初頭のあいつぐ労働組合論の登場と労働者の組織化の必要を訴える主張の登場に求めるもの、あるいはさらに遡って明治初年の翻訳による労働組合の数々の紹介に求めるものなど、いくつかの説が成り立ちうる。

私は、ある程度の理由・要因をそなえ、説明に論理一貫性があれば、それらをいちいち排除する必要を感じない。三原さんの言うように「他地域との違いを実証」しなければ、例えば美談の数や質の比較なしには、「故郷」や「里」を名のれないとか、「他地域との違いを実証」すれば、名のってよいという認識も、やや曖昧で、すぐには同意できない（もともと美談などは、その性格上広く知れわたるものではなく、表には見えずに隠れたまま終るものも少なくない。それだけに量も質も地域ごとに容易に比較できるものではない）。

三原さんの言う「違い」が他地域に対する優位性なのか、あるいは役割や性格の相違の指摘だけを意味するのか推測する以外ないが、地域ごとの公益の序列・優位性あるいは数・量を総合的・科学的に比較・評価するのは、公益の現われ方の多様性から言っても、不可能とは言わないが、言うは易く、実行は困難を極める。どんな秀でた研究者でも、よほどの歳月を費さないと、基準の設定から始まって、多くの課題が立ちふさがるので、超えるべき壁が高すぎる。海岸クロマツ林なら海岸クロマツ林のように、個々の問題ごとに比較・評価を行うことはできるであろうし、また役割や性格の相違を指摘するだけならば、庄内地域の場合も既存の資料だけでも十分に可能な場合がある。ただそれぞれの相違や多様性を超えて全体として総合的にはどちらが上かといった序列・優位度を加えた比較・評価を科学的に行うことは難しい。不毛な議論で終わる

ことも十分にありうる。

私は、「故郷」というものがしばしば人を前向きにしたり、鼓舞したりする面、また未来に向けたまちづくりに活用できる面もあると考えており、三原さんのように「過去を振り返るような」(103頁)側面しかないとは考えていない。また「景観」などと同様に「心」「好み」の問題や地域の戦略も関わりがちであり、その面からも、厳密な意味で「故郷」を名のる地域間の序列・優位度を科学的に比較することは、一般的には極めて困難であると考えている。むしろ多様性こそ重視されてよいとも考えている。

あまりにいい加減な要因・理由で「故郷」や「里」の名のりをあげても、どこからも相手にされるはずもないが、ある程度説得的な要件が揃えば、「故郷」や「里」を名のっても殊更問題はないと、私は考えている。庄内が「公益の故郷」を最初に名のれば、他の地域が名のってはいけないというものではない。そのあとでも隣県の秋田も、新潟も名のってもかまわない。それによって各々の個性や特徴から多様性を学ぶ楽しみもでてくる。学問にも多少の遊びやゆとりはあってよいと思うが、「故郷」「里」規定にも、遊びやゆとりがあってもよい。相応の評価にたえる要件が揃えば、あちこちで「公益の故郷」が名のられてもよいし、その積み上げとそれぞれの比較検討を通して、多様性の上に成り立つ日本全体の公益を総合的に受けとめ、検証していくという方法でも遅くはない。

そのような場合も、「美談」や「陰徳」に象徴されるように公益現象の現われ方・その読み方の難しさから、地域間で総合的に序列・優位度を比較することは不可能ではないが、厳密に科学的に比較をすることは極めて難しい。また個性や特徴にしても、たんなる「違い」の指摘を超えて序列・優位度を加える評価となると、客観化された評価というよりも、評価者の好みの入った序列・優位度の判定程度にに終わりかねない。秋田には秋田の地域性に根づく「公益の故郷」があつてよいし、新潟には新潟に相應しい「公益の故郷」があつてよい。それら多様な「故郷」を比較、検証することによって、日本全体の公益や「公益の故郷」の理解が進むと考えている。

庄内の「公益の故郷」について言えば、まず砂防林のクロマツ林一つとっても、庄内海岸のほぼ全域に、良好な環境をもたらしつつ、絨毯をひきつめたよ



うに長く広く伸びる光景をみれば、山形に遅れて砂防林の植林に成功した秋田県を含めて比較しても、全国でも有数である。

加えて、庄内では、公益の用語を取り入れた家憲や多くの公益の碑が古くからみられたことも、顕著な特色である。家憲に公益を取り入れた点では本間家のそれは、これまで知られる限り、歴史的に最も古いものである。また公益の文字を刻んだ「公益の碑」が、他では考えられないことであるが、庄内地域の中心である鶴岡市と酒田市のセンターの一つに戦前から厳然と建立されていること、これまで判明している「公益の碑」の建立年の最も古いものが天童（福沢諭吉撰文の「山口村開田記念碑」）、次いで鶴岡（平田安吉の「平田君遺徳碑」）にあることも、他地域に比べて庄内の特徴となっている。

さらに、庄内藩の農業倉庫は、戦前から農学者たちによって日本では最初の公益性の高い倉庫と評価されてきた点がある。山形県庄内総合支庁の関係者の皆さんと庄内地域を「公益の故郷」と呼んでよいかどうかの議論をしたとき、私がそう呼んでよいと説明した際に、上記の諸点の他に、そのように庄内藩の農業倉庫が戦前から研究者によって公益性の高さを評価されてきたことを、戦前の文献を手にとってもらって説明したことを思い出す。

以上のように、海岸クロマツ林など、いくつかの足跡・事蹟をみるだけでも、他の公益の事例をあれこれ付加しなくても、庄内地域を「公益の故郷」と呼ぶことにとくに問題はないと私は考えている。

それにしても、海岸クロマツ林などいくつかの個別的な問題ごとには庄内地域が他地域にまさっていると言っても、庄内地域と、秋田県や新潟県のある地域を比較して、全体としてどちらが一番か、あるいはより上かなどと序列や優位度を判定するのは極めて難しいし、それほど有効とは考えていない。

私は、「故郷」や「里」の提唱などには前述の通り、心や好みの問題も多少は入ってもよいと考えているが、もちろん、三原さんは三原さんなりに「公益の故郷」や「故郷」について自ら厳密に定義や成立要件を明示し、庄内地域はそれに該当しないと主張されるのは自由である。そういう前向きの方法・論理であれば、むしろ支持も得られるのではないかと思う。公益論・公益学の前進のためにも、そのように自らの「公益の故郷」の定義や要件を明快に示した上で主張されると、大きな前進、そして貴重な貢献になるはずである。

### 3 庄内の農業倉庫・山居倉庫は公益と無縁か

もう一つの三原さんによる批判として、農業倉庫の公益性に関するものがある。もちろん庄内地域の地主制、あるいはその背後に位置する庄内の農村や農業の実態やあり方にはいろいろと批判があるのを、私も否定するつもりはまったくない。ただ批判面のみ並べても、他の多くの側面を同時に見ていない場合は、総合的な評価とはならない。また活動・事業、成果、制度などの評価は、多様でありうる。一つの評価だけが絶対ということは一般的には言いにくい。自戒を込めて言えば、多様な意見・主張に耳を傾ける必要がある。

私は、戦前の農業関係の学者たちが、山居倉庫をはじめとする庄内における農業倉庫の前史にあたる庄内藩の農業倉庫を、日本における最初の公益倉庫と戦前から評価していたことを先に紹介した。そう評価しているのは、私が拙著（『公益の時代』論創社、2002年、他）で紹介した河田嗣郎を含む複数の学者たちである。彼らの公益の認識には、現在からみると、多少の違和感は感じるものの、私は、彼らが公益倉庫と規定する視点を否定する資料を持ち合わせていないので、江戸時代の庄内藩の農業倉庫は公益性が高いという位置づけと評価を得ていることをそのまま受けとめ、利用させていただいた。農業倉庫に対する私の公益性の評価は、そういう前史を含めておこなっていることは、例えば前掲『公益の時代』（22頁）の記述でもお分かりいただけると思う。

加えて、山居倉庫の公益性評価は、現代とのつながりも含め、山居倉庫の歴史全体にも注意を向けたものでもある。山居倉庫にしろ、海岸クロマツ林と同様に、現在に引き継がれ、歴史的・建築的景観としても活かされている状況、そして住民、地域、環境等への影響も視野に入れてよいと考えている。

さらに、山居倉庫も、他の庄内の農業倉庫も、経営陣や経営の形態において時代を超えて一貫して一つであったのではない。山居倉庫のみを見ても、創業期には旧庄内藩を代表するように酒井家、それに菅実秀や加藤景重らが株主の本間家に劣らぬ影響力をもった。創業期以外にも、産業組合成立以後の時代、原則として営利を禁じられる1916年の農業倉庫業法（施行は1917年）以後の時代、さらに準戦時・戦時体制の進行と共に、米価の安定と貯蔵米の統制組合による自治管理をめざす米穀自治管理法の導入、統制経済の強化のすすむ中で、

財団法人北斗会の設立に続いて山形県購買販売組合連合会へ経営を委ねる時代などがあり、山居倉庫に対する本間家（あるいは旧庄内藩上層部）の関わり・位置・権限もつねに単一・同一であったとは考えられない。私は、この辺のことについては正直言って専門的に深く研究したわけではないので、評価を一つに特定することはできないが、高橋義順氏などの歴史認識もあるように（高橋義順『山居倉庫の創業と転換』社団法人丕顕会、1989年。同『山居倉庫と庄内米』庄内倉庫株式会社、1997年）、同倉庫の歴史認識や評価は、なお多様であり、公益性が無いと唯一絶対的な判断を下せる状況にはないと受けとめている。

他にも、山居倉庫が会社なり組織として公表した社是、規則、心得、指針などにも公益性の強い内容があることも、私は指摘している。もちろん、文字に刻まれた方針と実態・現実との距離は別個に検証されなければならないし、その面からの批判があることも三原さんは、鎌形勲氏、菅野正氏らの文献を援用して、指摘されている。その指摘には納得できるところもあるが、そのような活字で示された山居倉庫の理念・方針にみられる公益性は、経営思想史、あるいは公益経営史の面からは全く無視することはできず、ただ全否定で終わらせてよいとは考えていない。

例えば、日本における最初の社会政策である1911年の工場法にしろ、穏健な鈴木文治でも、骨抜きなどと内容や水準の低劣さを酷評した。戦後の学者も、しばしば労働者にとっては堪えがたいほどの過酷な保護基準で、ザル法と評価した。にもかかわらず、学界では多くの学者が同法を日本における近代的社会政策の第一歩と位置づける。このようなことから、山居倉庫の規則類にみられる活字が伝える理念・思想などは、経営思想史や公益経営史の視点からは無視してよいものではなく、新しい眼で検証しなおしてみる必要があると考えている。

前史を含む山居倉庫にみられる公益性に対する三原さんの批判は、上記の個々の具体的側面にわたって新しい資料を基に批判を展開されたものではない。三原さんの前掲稿の101ページで展開された説明は、多様な認識を排除するかのようにある一面からの認識を専ら押し出しているようにとれるが、庄内地域の農業全体と本間家との関係を言っているのか、山居倉庫のみと本間家の関係を言っているのか、私には判読しにくいところもある。

同101頁の「倉庫の士族職員の職務は主家に対する奉仕」という箇所は、三原さんが他から引用した部分ではあるが、そこでは本間家の位置や関係がよくわからない。本間家は苗字帯刀を許されたとしても、士族は本間家を主家とは考えにくい。すると、「御家禄派と本間家が提携して」(101頁)ということが多くの人の共通理解といわれるが、全期間を通してなのか、ある特定の時期のみをさしているのが判読し難い。同様に、その際士族職員に対して本間家が具体的にどう関わったのか、「藩制そのままの人間関係」(101頁)という場合の山居倉庫の長い歴史における本間家の位置や役割は、時期ごとに具体的にどうであったのかが読みとれない。

すると、三原さんの山居倉庫の公益性に関する批判は、酒井家をはじめ、旧藩の役割も指摘しているものの、結局は庄内の農業において古き搾取関係を維持し、また山居倉庫においては主従的・封建的な労使関係を形成したと理解する本間家の関与を主要な根拠とするもののようにも受け取れる。庄内農業における本間家の位置や役割でも、評価は一つではないのに、庄内農業と本間家の関係に対する見方・評価をそのまま山居倉庫にも機械的にあてはめているようにもとれる。山居倉庫の経営や運営には、本間家以外にも多くの地主が関わっているが、従業員のみではなく、多くの地主を含む農民全体の山居倉庫への関わり方とそれに対する対応・処遇の仕方など、山居倉庫そのものの実態、またその全体像の認識・理解をもっと深めるべきではないかと考えている。

本間家の山居倉庫との関わりについて、マイナス面をあれこれ挙げることは可能であるし、そのことを無視すべきでもない。ただマイナス事例・問題事例をいくら指摘しても、それだけでは、ただちには山居倉庫の全体的評価にはつながらない。

その点は、公益性を評価されてきた人物、例えば渋沢栄一、佐久間貞一、大原孫三郎らにもいえる。資本家・経営者の立場にあったこと以外にも、渋沢らに対するある一面からの厳しい批判の存在は周知のことであるが、そのようなマイナス面を他の側面と総合的に評価して、渋沢らの公益なら公益の評価がなされてきたわけである。

本間家についても、三原さんが参考文献に挙げている五十公野清一の作品・著作は、「公益」の家憲も紹介するなど、彼が本間家を高く評価するようになった

てからのものであるが、五十公野がプロレタリア文学陣営に立っていた初期の時代の作品で、発禁にもなった『農民』（草原社、1926年）においてさえ、一方で本間家を厳しく批判・非難しながらも、他方で本間家の地域貢献、小作人の処遇でも他の地主よりも良好な条件の側面もあったことなどは認めている。三原さんの評価も、そのような多様な面を視界に入れた総合的な評価であれば説得的になるはずである。

本間家など地主や資産家、あるいは旧藩上層部が経営にあたる組織や活動は、それだけで公益性に反するというのであれば、本間家ははじめ資産家の関わったもの、例えば防砂林のクロマツ林も、小学校や中学校も、あるいは文庫や育英制度も公益性が否定されることになるが、それでよいのであろうか。

庄内でも、秋田でも、クロマツ林の植林に際しては、小作人や低所得階層を強引に人夫に調達することもあったと考えてよい。植林工事に際しての人夫たちに対する上からの調達や管理も、時代を考えれば、三原さんの指摘する明治以降の山居倉庫に劣らず甘くはなかったはずである（植林に貢献した小作人等民衆の役割については、拙著Ⅱ部第一章「海岸クロマツ林と公益の先駆者たち」224頁において簡略ではあるが、言及している）。現在でさえ、公益に寄与している企業でも、営利企業であれば、企業内における上下関係は想像以上に厳しいものがあり、法に触れかねないことでも上からの指示・命令として実行を迫られる場合もある。深く調査・研究すれば、そういうマイナス例は相当指摘できよう。ただそれだけでは、直ちには全体評価にはつながらない。

それに、三原さんが大いに評価され、依拠される鎌形勲氏の庄内農業に関する主張は、とくに理論面では再検証の必要があるのではないかという疑問ももっている。庄内の農村・農業に対する鎌形氏の深い研究・考察、特に農村・農民の生活の実態、慣習や慣行、土地制度、地主・小作関係・システムなどの研究成果や碩学ぶりには、大いに参考にさせていただき、敬意も表してきたが、本間家の庄内における位置づけや評価など理論的な面になると、一つの見方としては否定しないが、現代の新しい眼で検証しなおす必要も感じないわけではない。かつては猪俣津南雄著『窮乏の農村』（改造社、1934年）などを通して、庄内農村は貧困・窮乏の代名詞のように印象付けられたものであったが、そのような公式的・観念的な視点を残している農村理解や地主制認識には、なお学

ぶべきこともあるが、むしろそれを新しい視点・認識・論理に基づいて再検証することも必要ではないかと考えている。そんな現在、鎌形氏の理解・論理、またそれに依拠する三原さんの認識が、お二人各々の主張としては認めることはできるが、絶対唯一であるとも、全体が検証無しに首肯できるとも思ってはいない。

例えば、必ずしも公益の活動・事業とはいえないが、三原さんも援用している産米改良運動、乾田馬耕農法への転換、耕地整理の促進などをいう場合、いうまでもなく本間家のみでなく、庄内地域の各町村において多くの篤農家など農業指導者たちも、本間家に劣らず、それらに関与・貢献してきた。彼らの役割は本間家とどのように関わり、どう比較・評価されるのかなどを明らかにしていただくと、何事も本間家に収斂させ、マイナスに結びつけるまとめ方という印象を超えて、三原さんの主張も多くの人を納得させることができるのではないかと思う。

以上、三原さんの疑問・批判に対して、直接私に関わる部分にこたえさせていただいた。認識や論理は多様なものであり、ある一面からの評価や主張を絶対視して押し出しても、説得力をもたないことが多い。また農村・農業問題には、私は知識不足・認識不足の面が多いので、見当違いの理解をしている恐れがないとはいえない。私の理解や説明がそのような弊や誤りに陥っていないことを願っている。三原さんの私に対する批判を契機に、公益・公益活動をめぐる論議が大いに高まることを期待している。